

【書評】

横手慎二編著『ロシアの政治と外交』

(放送大学教育振興会, 2015 年, 228 ページ)

上野俊彦
(上智大学教授)

Yokote, Shinji, ed., *Politics and Foreign Policy of Russia*
(Tokyo, Foundation for the Promotion of The Open University of Japan, 2015)

Ueno, Toshihiko
Professor, Faculty of Foreign Studies, Sophia University

1 本書の構成

本書は、放送大学教材として編纂された教科書である。

15 章からなる本書の 13 の章 (1・2・5～15) を編著者として執筆した横手慎二は、慶應義塾大学法学部教授で、わが国の現代ロシア・ソ連外交史研究の第一人者である。残りの 2 章 (3・4) は、横手の同僚でもあり、わが国のポストペレストロイカ世代の現代ロシア政治研究者のトップランナーとも言える大串敦が執筆している。なお、7・8 については、横手と大学院でその指導を受けた新進の中馬瑞貴との共同執筆となっている。

本書の構成は、表の通りである。また各章の冒頭には「目標&ポイント」および「キーワード」が、章末には「学習のヒント」および 3 問からなる「演習問題」が付されている。また、1～3, 5～10, 12～15 の各章は、3 つの節から、4 および 11 の各章は、4 つの節から構成されているが、いずれも第 1 節において、歴史的背景ないし経緯としてソ連時代の状況が説明され、第 2 節以降で現状が説明されるという形式を取っており、ソ連時代の状況についても概括的な理解ができるよう配慮されている。なお、教科書という性質上、本書には注が付されていない。ただし、数量的データからなる表などには出典が付されている。

さて、本書 (以下、この項では便宜上、『横手本』と呼ぶ) の構成は、ロシア政治の教科書として妥当なものであろうか。それを確認するために、『横手本』と、第 8 版まで版を重ね、世界中で広く読まれているロシア政治の定番的教科書、White, Sakwa, Hale の *Developments in Russian Politics*¹ (以下、ここでは便宜上、筆頭著者名をとって『ホワイト本』と呼ぶ) の構成と比較してみよう。

両書とも 15 章からなるが、構成はまったく同じではなく、ページ数も、『ホワイト本』のほうが多く、『横手本』の約 1.5 倍ある。

¹ Stephen White, Richard Sakwa, and Henry E Hale, eds., *Developments in Russian Politics* 8, Duke University Press, Durham, 2014, 300 + xx pp.

目次を見ると、『横手本』には、『ホワイト本』にはない、「1993 年憲法体制」「政治と官僚」「ロシアの対外経済関係」「変動後の社会と政治文化」といった章がある。また『ホワイト本』では「連邦国家」に1章をあてているのに対して、『横手本』は、「ロシアの中央と地方の関係」「ロシアの中央と民族地域」という2つの章をあてている。同様に、『ホワイト本』では「対外政策」に1章をあてているが、『横手本』は、「ロシアの対外政策」を「対米・対欧州関係」「アジア諸国との関係」「ロシアと旧ソ連地域」という3つの章に分けて論じている。

他方、『ホワイト本』は、第1章の「ロシアの政治」において、ソ連期からの政治史を概観しているが、『横手本』の第1章の「基本的な社会経済状況」は、主として経済的指標に基づいて、ソ連末期からの社会経済状況の変化を解説するにとどまっている。この『横手本』の第1章の内容は、『ホワイト本』では、より経済に踏み込んだかたちで、「経済の運営」「ロシアの社会と社会的分裂」という2章にわけて論じられている。また、『ホワイト本』には、『横手本』にはない、「ロシア政治の軌跡：一つの解釈」という結論にあたる章が設けられている。さらに、『ホワイト本』の第9章「ロシアの法治主義に対する評価」と第14章「軍事・安全保障と政治」で論じられている問題は、『横手本』では扱われていない。また、『横手本』では「議会・選挙」で1章となっているが、『ホワイト本』では「ロシアの議会政治」「選挙過程」「投票行動」という3つの章に分けて論じられている。

このように、『横手本』と『ホワイト本』には、それぞれの特徴がある。『横手本』は、ページ数が少ない中で、経済や軍事・安全保障の問題については他書に譲り、憲法や官僚問題について1章を割き、中央・地方関係や対外関係についても多くのページを割き、それぞれ2章および3章構成にしている。他方、『横手本』には、法治主義ないし司法の問題や軍事・安全保障問題について扱った章がない。この点、「ロシアの政治と外交」を扱う教科書としてはやや不満が残る。

2. 本書の問題意識

著者は、その「まえがき」において、要旨以下のように述べている。すなわち、ロシアの政治と経済は、一見ただけでは欧米諸国のそれと区別がつかないが、例えば大統領選では現職が再選されるか、現職の推薦する候補者が選出されており、「フリーダム・ハウス」によると2005年以降のロシアは「非自由」の国と分類されており、汚職が大きな社会問題になるなど、欧米諸国とは異なる面がある。これらの否定的現象は、①社会主義体制から資本主義体制への転換には時間がかかること、②ロシアには個人主義的リベラリズムの伝統が弱く、パターナリズムが影響を及ぼし続けていること、③改革が一举にすすめられたため国内に非常に鋭い意見対立が生じたことから、憲法が大統領に非常に強大な権限を与えたこと、④資源輸出により資金確保ができるため、税金徴収の必要性が弱く、納税者たる国民の意見を反映しやすい政治システムを生み出そうとする下からの圧力が弱いこと、という4つの仮説によって説明される。本書は、これらの仮説に注目し、ロシアの政治が欧米諸国や日本の政治とどこが同じでどこが違うのかを考え、ロシアの現状と問題点を理解しようとするものである。

著者が、以上の4つの仮説に注目し、欧米諸国や日本の政治と比較しつつ、ロシア政治を理解しようとするのが本書の目的である、としている点は賛成である。

しかし、著者の言う「ロシアの政治と経済は、一見ただけでは欧米諸国のそれと区別がつか

かない」という見方は、必ずしも日本における一般的なロシア観ではないように思われる。むしろ、ロシアの政治と経済は欧米諸国や日本のそれとはまったく違うという、ロシア異質論のほうで、日本における一般的なロシア観ではないのか。だからこそ、著者の言う欧米諸国や日本の政治とどこが同じでどこが違うのかを考え、ロシアの現状と問題点を理解しようとすることが重要なのではないか。

「ロシアで起きていることはロシア固有のことであり、ロシアは異質である」と考えるのではなく、「ロシアは、欧米や日本とどこが似ていて、どこが違うのか」という視点が重要なのである。

3. 本書のいくつかの内容について

限られた紙幅の中で、本書の内容全体について評することは難しいので、興味深いと思ういくつかの箇所について取り上げる。

著者は第1章で、1990～2010年の21年間の殺人・殺人未遂の登録件数の推移を表で示している(12ページ)。この表では、1990年に約15,600件だった件数は急速に増加し、1994年に約32,300件というエリツィン期でのピークに達し、その後も約30,000件前後で推移し、プーチン大統領就任翌年の2001年に約33,600件というこの21年間を通じてのピークに達するが、その後は少しずつ減少し、2010年には1990年と同じ約15,600件に戻っており、また1997年から1999年にかけての数字は微増、2007年から2009年にかけての数字は減少を示している。また、第6章では、1992～2013年夏までに殺害されたロシアのジャーナリストが56人いたが、そのうちエリツィン期に殺害されたのが31人、プーチン期以降が25人いたことが示されている(87ページ)。これらの数字は、エリツィン期とプーチン期についての安易なステレオタイプやそれぞれの政権に対する単純なイメージを払拭するに十分なものがある。前者の数字は、殺人・殺人未遂の件数は必ずしも経済情勢と直接に結びつくものではないこと(ちなみに、1998年と2008年は経済危機の年であり、2000年から高度経済成長が始まっていることに注意)、後者の数字は、言論の自由の問題が殺害されたジャーナリストの数とはあまり関係がなさそうであるということを示している。そのほかにも、例えば第4章では、1996～2012年の、「大統領・政府(執行機関)発議法案の成立率と全成立法案に占める割合」(58ページ)や「国家会議における予算案審議所要日数」(62ページ)が、第5章では、1991～2000年の「地方行政政府長選挙結果」として「勝利した現職の割合」(65ページ)が、第6章では、1989～95年にかけて新聞発行部数が382億4980万部から87億9530万部に激減したことが(83ページ)、第9章では、プーチン期以降でも、官僚組織で働く圧倒的多数(連邦全体で48.3%)がゴルバチョフ書記長登場までに就職した人々であることが(124ページ)、いずれも数量データによって具体的かつ詳細に示されている。これらはほんの一例に過ぎない。本書では、各所で統計データや数値データが示されており、その多くがきわめて興味深く示唆的である。

数値だけではない。その記述にも、「目から鱗」の内容が少なくない。例えば、第9章には、「大統領であっても、強大な政策実現の手段を持たない限り、官僚組織を改革することが困難であることを示している。現在のロシア大統領は、ソ連の共産党組織のような強力な下部機関を持たず、しかもイデオロギー的な締め付けができない状況にある。このため、自発的に世論を喚起するマスメディアや官僚の行動を監視・監督する議会の助けを得て、官僚全体を制御す

る以外にないのである」という指摘がある。「権威主義的」ないし「強権的」という言葉からイメージされるような強力な権限を持つロシアの大統領をもってしても官僚機構を制御するのは困難という指摘は、はなはだ興味深い。

また、読者の学習のために用意されている演習問題にも興味深いものがある。例えば、第4章では、「ロシアの選挙における非公式な影響力行使と、日本の『組織ぐるみの選挙』やアメリカの『マシン政治』を比べてみよう」とか、「統一ロシアが圧倒的な優位政党になった後の立法過程を、日本の55年体制下の立法過程と比べてみよう」といった演習問題が与えられている。まさに、「ロシアで起きていることはロシア固有のことであり、ロシアは異質である」と考えるのではなく、「ロシアは、欧米や日本とどこが似ていて、どこが違うのか」という視点から考えることの重要性が指摘されているのである。

全体として、本書の記述は、教科書らしいオーソドックスで堅実な内容だと言えるが、若干の間違いがないわけではない。例えば、第3章に、「次に長く首相を務めたのはプリマコフである。彼もソ連時代には対外諜報庁長官を務め、行政の経験を有していた」との記述がある（46ページ）。しかし、この記述は、実際に彼が対外諜報庁長官であった時期が1991年12月26日（つまりソ連解体の時期）から1996年1月9日までであったことからすると、「ソ連時代には」という部分は明らかな間違いである²。また、それを言うなら、プリマコフが、対外諜報庁長官を解任された1996年1月9日から1998年9月11日の首相就任までの2年間、外務大臣を務めていたことも記述すべきであったと思われるが、そのことは書かれていない。また、その記述の1ページほど先に、「プーチンは長く大組織の中で活動してきたせい、人事の取り扱いがエリツィンに比べるとはるかに洗練され、穏やかだった。彼が大統領であった時期には、大統領と首相の関係は前の時期に比べると非常に安定していた」と述べ、プーチン政権期以降、首相の交代が少ないことを表で示しているが（47ページ）、エリツィン期、とりわけその二期目に首相が頻繁に交代し、政府総辞職も頻繁に行われたのは、何よりもまず、その時期の国家会議の第一党が野党の共産党であり、与党が少数派にとどまっていたこと、それに対してプーチン期以降は与党が第一党を占めていることに原因があるのであって、プーチンが「長く大組織の中で活動してきた」からではないであろう。また、ささいな間違いであるが、第1章で、「国家計画局（ゴスプラン）」とあるが（14ページ）、「国家計画委員会」の間違いである。第7章には、「ウクライナ連邦共和国」という国名が登場する（93ページ）。ソ連の連邦構成共和国としてのウクライナという意味なのであるか。ソ連時代、ウクライナの正式名称は「ウクライナ・ソヴィエト社会主義共和国」であり、短縮形は「ウクライナ共和国」であって、「ウクライナ連邦共和国」という国名は見たことがない。教科書であるからこそ、こうした誤記には気をつけたい。もちろん、これらの間違いは致命的なものではなく、本書の価値をいささかも低めるものではない。

本書が、待望久しい日本語で読める優れたロシア政治の教科書であることは論を俟たない。教科書の編纂は難しい仕事である。その難しい仕事を成し遂げた著者たちの労を称えたい。

² 対外諜報庁長官の前身である国家保安委員会第一総局長であった時期を含めても、プリマコフがこの職にあったのは1991年9月30日までしか遡ることはできない。ちなみに、国家保安委員会の解体に伴い、1991年11月6日からは、プリマコフは、国家保安委員会第一総局長から中央諜報庁長官となり、さらに本文で示したように、1991年12月26日に対外諜報庁長官となった。

横手慎二編著『ロシアの政治と外交』の構成

	『横手本』の構成		『White 本』の構成
	まえがき		まえがき
	(なし)	1	ロシアの政治
1	基本的な社会経済状況	11	経済の運営
		12	ロシアの社会と社会的分裂
2	1993 年憲法体制		(なし)
3	大統領・大統領府と政府	2	ヘゲモニックな行政府
4	議会・選挙	3	ロシアの議会政治
		4	選挙過程
		6	投票行動
5	市民と政治の間—政党	5	ロシアの政党およびその他の政治団体
6	マスメディアと政治	8	デジタル時代のロシアのメディアと政治 コミュニケーション
	(なし)	9	ロシアの法治主義に対する評価
7	ロシアの中央と地方の関係	10	連邦国家？
8	ロシアの中央と民族地域		(なし)
9	政治と官僚	7	ロシアの市民社会と対立の政治
10	市民の政治活動	13	対外政策
11	ロシアの対外政策（1）対米・対欧州関係		(なし)
12	ロシアの対外政策（2）アジア諸国との関係		(なし)
13	ロシアと旧ソ連地域		(なし)
14	ロシアの対外経済関係	14	軍事・安全保障と政治
15	変動後の社会と政治文化	15	ロシア政治の軌跡：一つの解釈
	(なし)		章別参考文献ガイド
	主要参考文献		参考文献
	事項索引		事項・人名索引
	人名索引		